

---

# Christmas Days

ありま氷炎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Christmas Days

### 【Nコード】

N5788Z

### 【作者名】

ありま氷炎

### 【あらすじ】

週末にクリスマスを控え、物語は始まる。

外国人を彼氏に持つ長三山ミヒロ、そして彼女のまわりつくお邪魔虫を心配しながらも出張に出かけるその彼氏パトリック。

中華系日本人の伍アキオは歌姫に恋して友人になることには成功したが、それ以上は進展する気配がなく……。

支社長の館林との付き合いに不安を感じ始めたユウコは……。シリーズを読んでないとかわりわかりづらい内容になっています。

(中文、英文ともに学習者中のもので書いているので誤りがある可

い) 能性があります。誤字脱字および質問は拍手コメからお送りください

「じゃ、パトリック。館林によろしくな」

タンタン旅行社の本社長、北山はバシバシと顔立ちのきれいな男の肩を叩く。男は長三山ミヒロの彼氏で中華系の外国人だった。

パトリックが支社のいたところに担当していた王子様ツアーの問い合わせが、12月のクリスマス時期に合わせて殺到し、その数が半端ではなかったので王子様ツアーを限定的に復活させることになった。日時はパトリックが抵抗したかいがあつたのか、なかったのか、当日を除くクリスマスイブまでの12月22日から24日の3日間に決まった。

(やっぱり嫌だな)

内心ミヒロはこのツアーを復活させることを反対していた。しかし、お世話になっていている会社のためにとぐつと我慢した。

(クリスマスには帰ってくるし、たった3日間だもん。いいよね)

「長三山さん、パトリックと離れるとさびしい？」

ふとそう声をかけられて、ミヒロの顔が凶星を指され真っ赤になる。声をかけたのは隣に座る木田タケルだった。

「別にそんなことはないです」

「本当？」

木田は完璧に動揺しているミヒロのくすつと笑いかける。

「本当です！」

「長三山さん、怒っちゃってかわいいな」

(かわいい?!)

そんなことを言われ、ミヒロの顔はますます赤みを帯びる。

「ミヒロ」

木田が他に何かを言おうとした瞬間、二人の間に割って入ったのはパトリックだった。

「あ、パトリック」

ミヒロは助け舟がきたとほっとして顔を見上げる。隣の木田はやれやれと首をすくめた後、くるりと回転椅子を回し、パソコンに目を向ける。パトリックは一瞬目を細めてその横顔を見たが、気を取り直すとミヒロに笑いかける。

「ミヒロ。I'm going to a meeting. I

'll go back home late today」(三

ーディングに行つて来る。今日は帰りが遅いから)」

「うん。わかった」

「マタネ」

パトリックはそう言うと言書の入った鞆を抱え、事務所を後にする。寒いのが苦手な男はかなりの厚着をした上に、コートを羽織っていた。

(なんか黒い雪だるまみたい)

ミヒロはその背中を見送りしながらそんなことを思う。

「長三山さん、顔がにやけてるよ」

「え?!」

ふいにそう言われミヒロはぱっと両手で顔を押しさえる。すると木田がくすくすと笑った。

「うっそ。長三山さんってからかいがあるよね」

「木田さん!」

(まったく、何でこの人はいつもそんなことばかり！)

木田は20代後半の男で、以前タイで別の旅行社に勤めていた。体育会系の体つきだが、物腰は柔らかく、そのギャップでもてそうな男だった。男は数ヶ月前にタンタン旅行社に入社し、どういうわけかミヒロによくちよっかいを出してきた。同じ事務所内ということでパトリックが面と向かって木田ともめたことはないが内心苛立ちを募らせていた。しかし、彼女はそんな彼氏の苦労もわからず、日々隣に座る木田のからかいの言葉に素直に反応して過ごしていた。

「Christmas? (クリスマス?)」

「是。Christmas。我?在一起……(そう。クリスマス。私達一緒に……)」

アキオがそう言いかけると、パソコンの画面上のアイリーンの姿が揺れ、消えた。

「不好意思。我要工作。那一天我很忙。(ごめんなさい。仕事があるから。その日が忙しいの)」

しかし声だけはヘッドフォンから聞こえてくる。どうやらパソコンを置いている机から離れたらしい。ガサガサと音も聞こえる。

「但是?完了工作的?候、可能……(しかし仕事が終わった後とか……)」

アキオは主がいらない薄暗い画面に向かってそう言う。

「?不起。我要出去做工。(ごめんなさい。仕事に行くから)」

歌姫の衣装に着替えたアイリーンが一瞬映り、その声があると無残にも画面が急に真っ暗になった。

(切られたか)

アキオはため息をついて天井を仰ぐ。

付き合っているというか、友達に昇格してから2週間が経とうと  
していた。クリスマスが近づき始め、今年はアイリーンと一緒に過  
ごそうと思って予定を聞いてみた。しかしアキオの歌姫はいつもな  
がらつれない態度だった。

（我ながらこうも冷たくあしらわれて、諦めないのがすごいな）

1週間前に3度目の渡航を果たした。しかし週末は特に忙しいア  
イリーンとゆつくりすごくこともなく、キス以上進展していない。  
友達という間柄、それは普通なのだが、アキオは彼女に触れたい、  
抱きたいと考えていた。

しかし、触れると変態と言われ射殺すような視線を浴びせられ、  
手をつなぐこともままならない状態だった。

（でも、絶対に私のことが好きはずだ。いつそ無理やり押し倒す  
とか）

そんなことを考えアキオは苦笑する。実行に移したら関係が終わ  
るのはわかっていた。強情な歌姫は今度こそ彼を許さないはずだっ  
た。

アキオは椅子から立ち上がると背伸びをする。今日は早めに仕事  
から戻ってきたので、時間はまだ7時を過ぎたところだった。窓の  
外から夕食の準備をする隣の家族の様子が見える。

（そういえば腹減ったな）

ふいに腹がすいたことに気づき、窓のカーテンを閉めると部屋を  
出る。

(確か、冷凍庫にピザが入っていたような……)

そう思い台所に向かおうとしたら、ピンポンとインターフォンが鳴る。

(なんだ？ 来客はいないはずだが？)

顔をしかめながらもアキオは玄関に向かう。インターフォンの画面を見ると、そこに映っていたのは端正な顔立ちの華僑、パトリック・コーだった。

「鈴木？ まだ事務所なのか？」

午後8時、事務所の電話が鳴った。通常ならば取ることはないのだが、その日に限って取った。するとそれは彼氏であり、社長である館林からの電話だった。

「やることがたまってるんです。社長の業務は終わりですか？」

「終わった。これからうちに帰るけど、今日はどうする？」

「……今日は家にまっすぐ戻ります。明日はパトリックが来る日ですよ？ いろいろ準備もしたいですし」

「パトリックか。奴のことなら心配しなくても、どうせツアーは明日日からだろう？」

「そうですね……」

館林の少し苛立った声が電話口から聞こえる。一緒に過ごしたいと思っっているのがわかった。

(でも家に行くと、半端なく疲れるから無理)

「社長。今日は無理です。明日なら」



「明日か。明日だな。その言葉忘れるなよ」

館林はそう言つと電話を切つた。

ユウコは受話器を元に戻すと息を吐く。

館林と付き合い始め半年になろうとしていた。経費も浮くし、一緒に暮らさないかという誘いを受けたが、自分の時間を大切にしたいと言つて断つてきた。

館林と一緒にいる時間が大好きだった。あの瞳に見つめられ、他愛のない会話をしながらテレビをみる。安心できる時間だった。しかし、それに浸ると抜けられなくなりそうで怖かった。館林はもてる。いつの日か彼が別れを切り出すのではないかと思い、ユウコは怖くて一緒に暮らしたくなかった。

(どうして彼は私と付き合いってるんだろう)

付き合いって半年目を迎える今、ユウコはそんな疑問を持つようになっていた。

「いってらっしゃい。早く帰ってきてね」

(母さん、それは私のセリフ！)

そう思いながらもミヒロは母の隣でパトリックの手を振る。ハンサムな彼氏はにこつと王子様スマイルを浮かべると玄関を出て行った。

昨晚

「ミヒロ。Do you love me? (ボクのこと愛してる?)」

ベッドにもぐりこんできたパトリックはじっとミヒロを見つめるとそう聞いてきた。

「うん」

ミヒロは少し顔を赤くしながらうなづく。

「I'll come back soon. Please call me everyday)すぐに戻ってくるから。毎日電話して)」

(パトリック?どうしたんだろ?)

彼が出張に出かけることはめずらしいことではなかった。こんな風に言われたのは初めてでミヒロは戸惑う。

「Do you understand? (わかった?)」  
「うん」

ミヒロは疑問に思いながらも再びうなづく。

「ミヒロ。I love you (愛してる)」

パトリックはミヒロの頬を両手で包むとキスをした。そのキスはいつもと違い少し強引でミヒロは驚いて身をよじる。しかし、パトリックはそれでひるむことなく、再び唇を寄せた。

「パトリック！」

ミヒロは悲鳴のような声をあげ、その胸を押した。強引なキスは嫌だった。

「……sorry (ごめん)」

パトリックはショックを受けたような表情を見せた後、体を起す。

「Can I sleep with you?」一緒に寝ていい？」

髪をかきあげ、そうたずねるパトリックはなぜか物悲しそうにミヒロを見つめる。

「いいけど。何もしないで。今日はなんだか嫌だから」

「Okay」

そう静かに答え、彼は再び横になるとミヒロを背後からそっと抱きしめた。

(どうしたの?)

ミヒロには彼の表情を見えなかった。

「Good night (おやすみ)」

ただそう囁かれて反射的におやすみと返す。そして気がつくとも眠りに落ちていた。

(やっぱり様子、おかしかった。今朝出て行くときもなんか笑顔がおかしかった気がする)

ミヒロは昨日のことを思い出しながら、パソコンの画面を見ていた。マウスを動かすが思考はパトリックのことでいっぱいだった。

「長三山さん！」

ほんと不意に肩に手を置かれ、ミヒロがぎよっと振り向く。

「ひっかつかった」

ぶにっと指が頬をつき、ミヒロは幼稚な悪戯に引っかつかったことに気づく。

「木田さん！何してるんですか！」

(今時こんなことする人がいるなんて)

「いらすら。昔よくしたよね。なんか長三山さんって引っかかりそうだったのでやってみた」

「なんですか、それ」

ミヒロが無然とした態度でそういう。

「長三山さん、ぼーとしてるからちよっと刺激が必要かなと思って彼氏と離れてるからって仕事の手を抜いたらだめだよ」

「わかってます」

そんなにぼーとしてたのかと反省しながらも、木田のいたずらで気を悪くしたミヒロは堅い表情のままだった。

「ほら、これ確認よろしくね」

木田はミヒロのすこし怒った顔にひるむことなく、青色のファイルを渡すと隣の席に座る。

「!?!」

ファイルと開くとそこには紙が挟まっていた。

『夕食一緒にどう?』

ミヒロは驚いて隣を見るが木田は飄々と仕事してる。

(なんかよくわからない人だな)

ミヒロはファイルをパタンと閉めると、パソコンに向き直る。そして社内メールで『お誘いありがとうございます。でも無理です』と返事を返した。

『我不在的？候、？看着？（ボクがいない間、彼女を見ていて）』  
昨日訪ねてきたパトリックは神妙な面持ちで伍アキオにそう言った。どうやら社内にお邪魔虫がいるとようだった。その虫がミヒロに手を出さないように自分が帰ってくるまで見張っておいてくれと頼まれた。

（見張っていてくれてって難しいことを頼むよな。まあ、ミヒロちゃんなら浮気なんてしないと思うけどな）

アキオはそう思いながらパラパラと資料をめくる。今日の午後から訪問する予定の会社の決算書だった。

（まあ、私も暇だし。夕食にでも誘ってそれとなくお邪魔虫のことでも聞き出すか。パトリックが心配する位な奴だ。見て見たいし）

アキオは休憩所に行くとき携帯電話御取り出し、ミヒロにかけた。

「鈴木、紹介しよう。パトリック・コーだ。会ったことあったよな」  
「はい。お久しぶりです。覚えてますか？鈴木ユウコです」

ユウコは事務所に現れた優しげな王子様に少し見とれながらそう挨拶をする。

( やっぱり、この人ハンサムだなあ )

「覚えてマスヨ。鈴木サン」

王子はにこつと微笑むとそう答える。

( 笑うとかわいい感じになるんだ )

「鈴木。事務所の奥にある衣装を取ってきて」

「 ぽー」としてユウコに館林が声をかける。声質が少しとがったものでパトリックが不思議そうな顔をする。ユウコも同様だったが、衣装を取るために事務所の倉庫に向かう。

「パトリック。鈴木を誘惑するのはやめろよな」

「ユーワク? Impossible! 僕が好きなのはミヒロデスカラ」

「わかってるよ。でも、その王子様スマイルは事務所では出すなよな」

「??? OKデス」

二人がそんな会話をしていると段ボール箱を抱えたユウコが姿を見せる。

「鈴木、ありがとう」

館林は少し慌ててユウコから段ボール箱を受け取ると机の上に置く。

「Ah, memories! (うわあ。懐かしい)」

パトリックは懐かしそうに段ボール箱を開けると、中から白い衣装を取り出す。

( 本当に王子様の服だ。すごい、でも似合いそう )

ユウコは白い衣装を体に合わせ、あーでもないこーでもないポーズを決めるパトリックを見ながらそんなことを思う。その横で館林はじつとパトリックを見つめるユウコを横目にそっと溜息をついていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5788z/>

---

Christmas Days

2011年12月21日00時52分発行